

## 論文

# 映画「朝鮮の子」(1955)の製作プロセスをめぐって

板垣竜太<sup>†</sup>

**要約：**記録映画「朝鮮の子」(1955年3月)は、東京都立朝鮮人学校への東京都教育委員会の廃校通知(1954年10月)をきっかけとして、それに対する反対運動のなかから製作された。本稿はこの映画の製作プロセスに注目し、そこに表れている関係性を歴史化することを目的としている。「朝鮮の子」の製作は在日朝鮮人の教育運動組織が推進し、在日朝鮮映画人集団が共産党系の記録教育映画製作協議会のメンバーとともに脚本、演出にあたった。荒井英郎が中心となって進めた脚本の〈初稿〉にもとづき、1954年12月下旬から撮影がはじまるが、内容に異論が出たため、1955年1月には一度撮影を中断し、京極高英を中心に脚本の〈改訂稿〉をまとめた。その過程で、子どもの語りを中心としたつくりが変わった。実際に作文を原典とするシーンは多くないものの、改訂により全体として朝鮮人の主体性がより強まる内容になった。この映画には、朝鮮人学校の教育実践とそれととりまく教育運動をめぐる関係性が記録されており、とりわけ「敏子」の作文シーンはそうした特徴をよく示している。ただ、脚本改訂や資金難により当初の予定より完成が遅れた。その間に廃校反対運動は学校の各種学校化を前提とした条件闘争に転換しており、結果的に上映も不活発だった。

キーワード：記録映画、朝鮮人学校、生活綴方

## 目次

1. はじめに
2. 映画「朝鮮の子」の全体的なプロセス
  - 2-1. 背景としての都立朝鮮人学校問題
  - 2-2. 映画公開にいたるまで
  - 2-3. 映画に対する反応
3. 脚本からみた映画の変化
  - 3-1. 脚本〈初稿〉と生活記録
  - 3-2. 脚本〈改訂稿〉での書き換え
  - 3-3. 〈完成版〉へ
4. 「敏子」の作文シーンと朝鮮人学校の教育実践
5. おわりに

<sup>†</sup>同志社大学社会学部教授

\*2019年1月7日受付、2019年1月8日掲載決定

## 1. はじめに

映画「朝鮮の子」(1955年3月公開)は、東京の枝川を中心的な舞台に当時の朝鮮人教育とそれを守ろうとする人々の様相を生々しく描いた記録映画として、今では広く知られている。ただ、この映画は当時さほど広く上映されることなく、1980年代までは知る人ぞ知る作品として事実上埋もれていた。本稿は、この映画の製作<sup>(1)</sup>過程について、脚本や関連資料などを用いて明らかにするものである。

まず私がこのような調査をおこなうことになった経緯について説明しておきたい。私はここ10年以上にわたり植民地支配責任概念を定立する作業をおこなってきた。そのために植民地支配責任論の系譜作成を試みてきたが、その一環として朝鮮人強制連行論の系譜をたどる作業を徐々に進めてきた(이타가키 2014, 2017; 板垣 2015)。そこでは敢えて1945年から1965年——日韓条約が締結された年であるとともに、<sup>パクキョンシク</sup>朴慶植が記念碑的な著作『朝鮮人強制連行の記録』(朴慶植 1965)を出した年——までに時代を限定して、戦後日本を中心にさまざまな場で語られた朝鮮人強制連行論が、いかなる権力関係および闘いのなかで出てきたのかを歴史化することを試みてきた。その一つに映画「朝鮮の子」があった。

映画「朝鮮の子」にはたいへん印象的な一場面がある[資料3の場面24-31](図1)。東京都立朝鮮人学校(後述)に通う敏子<sup>としこ</sup>が、作文の時間に、日本の一般の公立学校に通っていた時代のことを思い出して書いた朝鮮語の作文を読み上げる。敏子は当時朝鮮人であることを級友に隠していた。ところが友だちを連れて家に帰ると、たまたま神戸から来たおばあさんが朝鮮特有の白い服を着て座っており、朝鮮語で声をかけてきた。敏子は恥ずかしくなって逃げ出し、朝鮮人として生まれたことを悲しんだ。その姿を見たおばあさんは淡々と語り出す。日本の支配下の朝鮮はひどい暮らしだった。食べるものもなかった。隣の金さんは徴用だといってひっぱって行かれたし、李おじさんは野良仕



図1 「敏子」の作文シーン  
(備考) 映画「朝鮮の子」より。左は「敏子」、右は「神戸のおばあさん」。

事している最中にトラックで連れて行かれた。こうした植民地史および渡航史の概要ともいえる内容を含む語りを聞いた敏子は、それまでの自分の考えを悔い改める。その姿を見た教師と級友が拍手を送る。およそ以上のようなシーンである。

私はこのシーンの成立過程を知りたいと考えた。幸いこの映画については在日朝鮮人史研究者の高柳俊男が詳細に調べており、この場面で朗読された文章の原型が歴史学研究会の機関誌の別冊『歴史学研究 特集号 朝鮮史の諸問題』(1953年7月)に掲載された「祖国はどこ：在日朝鮮人学童の作文」のなかの1本、<sup>カンミンジョ</sup>姜敏子(当時、東京都立朝鮮人中高校生徒)の作文であることが明らかにされていた(高柳1989c:48)。ところが当の作文を読むと、確かに兵庫県の高砂から来た「おばさん」は出てくるが、上記のような戦時強制動員の経験が直接語られているわけではなかった。では、一体どのような経緯でこの場面ができあがったのか。それを究明するには製作過程の内情に分け入る必要があった。

私はつてをたどって何とか2つのバージョンの脚本、すなわち〈初稿〉(資料1；以下「初」と記号化)と〈改訂稿〉(資料2；以下「改」と記号化)の写しを入手した。その資料からは映画ができあがっていくプロセスを生々しく知ることができた。さらに当時の在日朝鮮人新聞や雑誌などをめくり、関連した情報の肉付けをおこなうことによって、その製作過程がより具体的に浮かび上がってきた。本稿はその調査結果をまとめたものである。

映画「朝鮮の子」をめぐっては高柳(1989a-e, 1993, 1995)が先駆的な研究であり、全体的な分析はそこで出そろっている。高柳自身もシナリオを入手しており、部分的には完成版との異同を紹介してはいた(高柳1989e:59-60)。ただ、その内容に踏み込んだ分析はなされておらず、また製作過程を伝える同時代の資料の検討にもいたっていなかった。その後、この映画の演出を務めた<sup>リョウソク</sup>呂運珏のインタビューが出され(鄭栄桓2014)、それにより内部事情の一部がさらに明らかになった。こうした研究状況を踏まえ、私は映画「朝鮮の子」の2バージョンの脚本(資料1；資料2)と公開された〈完成版〉の映画を脚本と同様の形式に起こしたスクリプト(資料3；以下「映」と記号化)を資料として掲載することにした(以下、映画や脚本のシーンを参照する際には、[映24]のように、角括弧にくくって[資料の記号+2桁の場面番号]という形式で表記する)。

本稿では脚本の変化を含めた映画のメイキングの解明を試みるが、そのことの意義についてあらかじめ述べておきたい。ドキュメンタリー映画が製作を進めていく過程で徐々に形づくられていくのは間違いないが、それは確固たる原型ないし理想型がまずあって、それらを実現していくというような線形の発展論的図式で単純に捉えることはできない。そのプロセス自体に当時の歴史性、諸主体の関係性が表れてくるのである。特

に映画という媒体は集団的に作品が製作されるため、そこにはさまざまな社会的関係の力学が作用する。最終的に「完成」して公開された映画も、それが「終わり」ではなく、それ自体がプロセスの一断面であると考えer必要がある。

もとより「記録映画」といっても密着取材をしたようなドキュメンタリーではないわけで、どのシーンも脚本を基礎に演出が入ったものである。そもそも当時の技術では、大型の録音機器と電源装備を必要とする光学録音から比較的小型の磁気録音への移行期であって(上倉 2003)、このような小規模映画の予算では、ロケ撮影において音声をシンクロ(映像と同時に録音)することは事実上不可能で、音声を別録り(アフレコ)するしかなかった。つまり「記録映画」といっても、演出された「動く絵」の記録が中心であり、文字として起こせる音声はほぼ全て事後的にかぶせたものだという点は注意が必要である。もちろん舞台となる学校や「朝鮮部落」は実際の現場であり、映像やナレーションとして登場するのも朝鮮人学校の子どもたちである。それに描かれた内容は、まさに現在進行形で動きつつあった朝鮮人学校の状況であった。すなわち、「記録映画」の分析にあたっては、それが何か「ありのまま」の状態を撮ったものというよりは、それができあがっていくプロセスの諸相態がフィルムに記録されているものとして見る必要がある。そうした製作プロセスに見られる関係性の諸相を歴史化することこそ、本稿の眼目がある。

## 2. 映画「朝鮮の子」の全体的なプロセス

### 2-1. 背景としての都立朝鮮人学校問題

映画「朝鮮の子」が製作された背景には1949年の暮れから1955年3月まで5年あまり運営されていた東京都立朝鮮人学校の存在がある。先に述べてしまえば、この映画の企画は、1954年10月に東京都教育委員会(以下「都教委」)が同校に対して年度末までの廃校を通知したことを契機に進められたと考えられる。都立朝鮮人学校について論じられたものは研究や当事者による記録も含めて比較的多いので(李東準 1956; 小沢 1973; 梶井 1974; 金徳龍 2002; 松下 2018)、ここでは映画の内容や製作過程に直結するものに限定して、その背景を述べておきたい(以下、映画や脚本のシーンとして登場する要素については随時表記する)。

戦後日本の占領政策において、民主化・非軍事化改革よりも冷戦の論理にもとづく反共政策が突出する「逆コース」が色濃くなるなか、1949年9月、日本政府は団体等規正令を在日朝鮮人聯盟(朝聯)等に適用し、組織の解散および財産の接収等を強行した[映35]。翌10月、政府はこれに続けて朝聯傘下の朝鮮人学校の閉鎖措置を決定した[映36]。法的根拠は貧弱だったが、これにより朝聯系と認定された朝鮮人学校362校が

年度末(1950年3月)までに相次いで閉鎖させられた。閉鎖自体は全国的な施策だったが、その後の過程は、教育行政および在日朝鮮人運動のあいだのさまざまな駆け引きの結果、地方によって状況が大きく異なることになった(松下2018:第II部)。

東京都の場合、1949年12月20日に東京都教育委員会が「東京都立朝鮮人学校設置に関する規則」を定め、朝聯傘下にあった朝鮮人学校を東京都立第1~第12朝鮮人小学校、朝鮮人中学校、朝鮮人高等学校として改組することになった。都教委の定めた「朝鮮人学校取扱要綱」では、「朝鮮語・朝鮮歴史等は課外教授とする」、「課外教授以外の場合の教授用語は日本語とする」、「学校長は日本人有資格者をあてる」、「朝鮮人は教育職員適格審査に適格の判定を受け且つ資格を有する者」から教員を選ぶなど、民族教育の自治が著しく制限された[映40-41]<sup>(2)</sup>。しかし、日本の敗戦後に何とか構築してきた民族教育が強引に押さえつけられたことに対する朝鮮人学校関係者や在日朝鮮人運動側の反発は強く、朝鮮人と日本人の「二重の教員組織」(小沢1973:315)として学校が運営されたり、「課外ではなく、正課の授業科目のなかに民族教育をもちこ」んだりなど(李東準1956:99-100)、事実上の自治を確保しようという試みが続いた。こうした「上」からの公的な学校管理と「下」からの民族教育自治確保の動きが、その後の行政との葛藤の源泉となった。

そうした葛藤は、在日朝鮮人運動に対する公安の敵視とあいまって、武装警官の突入という事態まで発展した。1951年2月28日の早朝、東京朝鮮中学校の寄宿舎に数百名の武装警官が突入した(2・28事件)。その寮出身の高校生が「反戦ピラ」を所持していたとの容疑から、そこまで大きな手入れとなったのである。これに対して学校側は3月7日にPTA総会を開いたが、これを「無届集会」とみなした警察側が再び数千人規模の警官を動員し、20名あまりが病院に収容され、9名が検挙された(3・7事件)[改43]<sup>(3)</sup>。

それから間もない4月11日、都教委は「本都教育委員会の方針に副わない点がある」として学校に通達を發した<sup>(4)</sup>。そのなかで都教委は、校長による教室巡視や教材・掲示物の点検を徹底すること、朝鮮語および朝鮮の地理・歴史担当の講師が一般教科を担当してはならないし一定時間以上の勤務もしてはならないことなど、一層の管理を強める方策を提示した。

さらなる契機は、サンフランシスコ講和条約の発効(1952年4月28日)を期に旧植民地出身者が日本国籍を正式に離脱することになったことによって訪れた。同年6月、都教育長が東京都立朝鮮人学校教職員組合(以下「朝教組」)との会見で、講和発効後は「外国人子弟教育」の責任を日本政府が負うのは正常でないから、朝鮮人が責任を負うべきだという旨を表明した(朝教組1954:19)。さらに9月には都教委が朝鮮人の義務教育を受ける権利の喪失を通達し、翌1953年2月には文部省の初等中等教育長もま

た同趣旨の通達を發した(松下 2018: 172-173)。これは「私立移管問題」と呼ばれ、学校関係者のみならず日本の文化人らもまきこんだ反対の大衆運動が展開されることになった(梶井 1974: 92-103)。

都教委は学校にさらなる圧力を加えた。1953年12月、都教委は朝鮮人学校PTA連合会代表を出頭させ、6項目にわたる「覚書」を提示した(朝教組 1954: 23-27; 梶井 1974: 164-182; 小沢 1974: 387-398)<sup>(5)</sup>。すなわち、①「イデオロギー教育」を施してはならない、②民族課目を課外とする、③児童生徒の定員を守る、④「生徒の集団陳情」をさせない、⑤未発令教員を教壇に立てない、⑥正規教職員以外は職員会議に参加させない、という内容であった[改 44-45]。当初は「形式的」なものに過ぎないとのことだったが、翌1954年の3月になると都教委は全項目受諾か廃校かの二択を迫る強硬策に出た。結局4月9日、朝鮮人学校側が6項目を承諾したが、都教委側は即日「東京都立朝鮮人学校の運営について」との詳細な通知を学校長宛に發した。

こうした朝鮮人学校側の妥協もむなしく、1954年10月5日、ついに都教育庁はPTA連合会に対して年度末の廃校方針を通達した[初 40-42; 改 54; 映 46](梶井 1974: 191-192)。これに対して朝教組は日教組、都教組とともに廃校反対運動を展開した<sup>(6)</sup>。ただ、朝教組の反対運動の方向性は一貫せず、12月はじめには、廃校反対から日朝間の「国交調整」まで廃校を「延期」という要求へと転換した。さらに1955年2月はじめには都立という運営形態にこだわらず、朝鮮人の子どもの集団教育ができる予算を確保し、各種学校の認可および教職員身分の完全保障の獲得を要求する条件闘争へと移行した。このように学校存続のための朝教組の運動方針は、廃校「反対」(1954. 10)から、国交調整までの廃校「延期」(1954. 12)、さらに都立からの離脱を前提とした実質的要求獲得闘争(1955. 2)へと大きく変わった。この条件闘争が実を結び、都の臨時文教委で予算が通過し(3. 11)、都議本会議で予算が通過し(3. 15)、臨時都私学審議会で学校法人認可が決定した(3. 23)。こうして1955年3月末日をもって都立朝鮮人学校の歴史は幕を下ろし、4月から各種学校としての東京朝鮮学園の歴史がはじまった。

以上のような東京都での動きは、ちょうど朝鮮人運動団体の大きな路線転換とも重なっていた。1954年8月30日、朝鮮民主主義人民共和国(以下「北朝鮮」)政府は、南<sup>ナム</sup>日外務相の名義で「日本に居住する朝鮮人に対する日本政府の非法的迫害」に抗議する声明を發表し、そのなかで在日朝鮮人のことを「朝鮮民主主義人民共和国公民」と呼んだ[映 45]<sup>(7)</sup>。翌1955年2月25日には、北朝鮮政府が再び「対日関係に関する朝鮮民主主義人民共和国外務相の声明」を出し、日本政府に対し日朝国交正常化を呼びかけた<sup>(8)</sup>。「祖国」からの呼び声を受け、1955年5月、在日朝鮮統一民主戦線(民戦)にかわって、新たに在日本朝鮮人総連合会(朝鮮総聯)が結成された。結成大会で採択され

た宣言文は、その運動路線について、民戦の時代には「正しい路線から離脱していた」として批判したうえで、「朝鮮民主主義人民共和国の公民」として、「朝鮮民主主義人民共和国政府と敬愛する首領金日成元帥のまわりにいっそう固く結束させ、わが祖国の平和的統一・独立を達成」することを掲げた<sup>(9)</sup>。それまでの民戦が日本共産党との関係にもとづいて、日本の民主化や革命運動に参加してきたことを「内政干渉」だと批判してその路線を放棄し、「朝鮮民主主義人民共和国政府のまわりに総結集」させることを目指すものであった。

映画「朝鮮の子」はまさにこうした在日朝鮮人の民族教育と民族運動の大転換期に企画され製作されたものであった。

## 2-2. 映画公開にいたるまで

映画「朝鮮の子」がいつどのように発案されたのか。私はまだそれを直接知ることのできる資料に行き当たってはいない。ただ、その一原型と考えられるものとして、1954年6月に公開された「民戦ニュース」第1集を挙げることができる<sup>(10)</sup>。そのビラ「記録映画「祖国の平和的統一独立のために！」民戦ニュース第1集」によると<sup>(11)</sup>、同映画は民戦中央委員会および文化宣伝部が企画し、在日朝鮮映画人集団が製作し、自由映画人連合会、記録映画製作協議会、在日朝鮮中央文宣隊が協力してつくられた。この映画は「一九五二年から五四年メーデー迄の三年間に亘る在日六〇万朝鮮人の斗いを記録した」ものであり、上映時間は約30分であった。朝鮮人学校問題に絞った作品ではないが、1948年4月の「阪神教育弾圧事件」からはじまり、吉田茂政府の「朝鮮人の民族教育をふみにじって、朝鮮人を再び奴隷にしようとするファツシヨ政策」を批判し、都教委の6項目押しつけに対する保護者たちの抗議を写しだし、阪神教育闘争6周年記念大会を描くなど、民族教育運動にそれなりの比重を置いていた。同ビラでは、次のとおり在日朝鮮映画人集団が第2集の製作を準備していることも伝えている。

在日朝鮮映画人集団では「祖国の平和的統一独立のために」第一集につづいて、第二集を製作すべく準備をすすめているが日本に於ける六〇万朝鮮人の苦しい生活の実相を解明するもので、多面的な朝鮮人の生活を追って北は北海道から南は九州までカメラを担いで全国を行脚する。在日全同胞の積極的な協力をもとめている。

長さは第一集と同じく三巻もので、日数は約六ヶ月、製作費一五〇万を予定している。

第2集ではより生活に密着した作品を目指していること、後述のとおり「朝鮮の子」の製作過程でも全国の同胞の撮影が進められていたことなどからして、のちの作品の源流の1つということができる。

ここで「民戦ニュース」および「朝鮮の子」を中心的に製作した在日朝鮮映画人集団

と、「朝鮮の子」製作への日本人の参加において重要な媒介役割を果たした記録教育映画製作協議会（初期には団体名に揺れが見られるが、これで統一しておく）について述べておこう。在日朝鮮映画人集団の一員だった呂運珏によると（鄭榮桓 2014）、同団体の中心人物は金順明<sup>キムスンミョン</sup>であった。日本の植民地時代に朝鮮映画株式会社で働いていた金順明は、解放後に朝鮮映画同盟を組織して常任委員の1人となった。同盟では北朝鮮に映画撮影所をつくるため、1946年3月、「日本で機材を買って北側に行くという任務を帯びて金順明氏は日本にきた。」ところが「日本で機材を買って出発はしたものの、海が荒れて京都の舞鶴に戻ってきた。」結局警察に捕まり機材も没収されてしまった。東京駅前の丸ビルの現代映画社を拠点に金順明や呂運珏が活動するが、朝鮮戦争下の1951年3月、占領軍の手入れもあって解散を余儀なくされた。1953年4月、中国を訪問した平野義太郎が北朝鮮で製作された映画「郷土を守る人々（향토를 지키는 사람들）」のフィルムを持ち帰るが、これが日本の税関で留め置かれた。1953年7月、この映画を税関から奪還し上映する運動のなかから結成されたのが在日朝鮮映画人集団（委員長は金順明）であった。

一方の日本人側の団体たる記録教育映画製作協議会は、1952年のいわゆる「血のメーデー」の記録映画「1952年メーデー」（吉見泰<sup>ゆたか</sup>監督）を大衆カンパのみによって製作したことをきっかけとし、「民主記録映画教育映画の製作」を目的として1953年4月に結成された<sup>(12)</sup>。協議会は、1950年前後に倒産や解雇の憂き目にあったドキュメンタリストらの集団が結集しており、日本共産党（五全協時代）の文化政策の指導下で、政治・労働運動を主題とした諸作品を製作していた（佐藤 2017）。なかでも岡山県飯岡村における民主的な地域運動としての考古学発掘の様子を描いた「月の輪古墳」（1954年）は、荒井英郎<sup>ひでお</sup>が監督、吉見泰が脚本、丸山章二が語りに関わっていたが、かれらはその後「朝鮮の子」にも演出や脚本で関わることになる。この協議会は1955年3月に教育映画作家協会として再発足するが、吉見泰はその運営委員長であり、荒井英郎、丸山章二のほか、「朝鮮の子」で脚本・演出を担当した京極高英もその会員であった<sup>(13)</sup>。再発足以前の諸作品は、のちに作家協会の関係者により「政治運動に従属した作品」（佐藤 2017: 41）と批判されることになるが、「朝鮮の子」はこの協議会時代の最後の作品となった。

以上を前提として「朝鮮の子」の製作体制を見てみよう。「朝鮮の子」のチラシ（1955年1月頃のものか）は、「在日朝鮮の子供たちの生活と教育の実態を広く日本国民にうつたえようとして今度、朝鮮人学校 PTA 全国連合会及び朝鮮人教育者同盟では在日朝鮮人映画集団と共同で」製作すると伝えている<sup>(14)</sup>。この書き方からして在日朝鮮人の教育運動に関わる民戦傘下の全国的な保護者組織（PTA；のちの「教育会」）および教員組織（教同）が主導し、映画人集団とともに製作を進めていたことが分かる。



脚本〈初稿〉および〈改訂稿〉の冒頭を見れば、製作委員会にはこの3団体のほか、朝教組、都立朝鮮人学校生徒自治会連合会、民戦の中央委員会と東京都委員会、文団連(在日朝鮮文化団体連盟)<sup>(15)</sup>、東洋映画社<sup>(16)</sup>が関わっていた。ただし、完成した映画のクレジット(資料3冒頭)ではこれらの団体名が見えず、関与の仕方や度合いは不明である。

当時の『解放新聞』記事<sup>(17)</sup>によれば、「朝鮮の子」製作委員会の事務局は李興烈<sup>リフンヨル ナムイリョン</sup>、南日龍<sup>ナムマンシク</sup>、南萬植<sup>ナムマンシク</sup>、金順明であった。このうち李興烈は都立朝鮮人高等学校・中学校のPTA専務理事かつ全国PTA連合会書記、南日龍は同社会科教師・校務委員であり教育者同盟の中央委員長であった<sup>(18)</sup>。金順明が映画人集団の代表として名を連ねているが、呂運珏(鄭榮桓 2014: 37-38)によれば製作費の工面の責任を彼が負った。ただ、実際の映画の製作は映画人集団が主導したと見られるものの、「全てを自分たちでつくる力はなかった」。そのため、「日本の進歩的な映画人たち」とともに映画づくりを進め、最初は荒井英郎が演出を担当した。実際、脚本は「記録映画製作協議会(京極高英、吉見泰、荒井英郎、丸山章治)と映画人集団の共同執筆」で進められ、それをもとに撮影が1954年12月22日から開始された<sup>(19)</sup>。したがって、10月5日の廃校通知から如上の製作体制を整え、12月までには脚本の「初稿」(資料1)ができていたということになる。

撮影初期段階の企画について『解放新聞』(1955. 1. 15)は次のように伝えている。

最初の場面は児童らの隠すことなき目を通じて見た東京枝川の同胞部落の様子からはじまる。こうして児童の作文を通じて同胞の生活と、そのなかで学び、将来を準備する学生らの姿が事実をもとに描かれていく。カメラはあの1948年における日本政府の一方的な教育弾圧から(いや、その前の九州炭鉱に強制徴用されたときから)のあらゆる弾圧を描いて(それも児童の目を通じて)いる。いかなる主観も歪曲もなく、この映画全3巻は日本における民族教育の来歴を縦に横に提示する、これまでになかった一大教育防衛の歴史なのである。

また、制作委事務局長の李興烈は同記事に次のような談話を載せた。

この映画は、全体同胞らの力により製作されます。この映画の内容としては、日本の各地にあるわが民族教育の来歴と様子を描こうとしました。既に〔1月〕12日に映写の1班は九州地方の炭鉱地帯の同胞の姿を描くために出発しており、北海道・岩手・名古屋・大阪・神戸などで朝聯時代からある学校もこの写真のなかにおさめました。そして今この映画は極めて難しい条件のなかで、全体同胞の1人が1枚ずつ(30円)の試写観覧券を買うことにより製作されており、これに積極的な協力を衷心から期待します。

このように東京枝川を中心としながら全国の朝鮮人学校をフィルムにおさめようとしていた様子が分かる。資金の不足分はカンパや同胞の観覧によりまかなうことにして、このまま順調に行けば2月5日に封切りという急ピッチで製作が進められた<sup>(20)</sup>。

ところが、ことはそう簡単には進まなかった。脚本を書き直して撮り直すことになったのに加え、制作費カンパも思うように集まらなかったのである。この点について、1955年2月26日付の『解放新聞』の記事「製作費に困難をかかえる記録映画「朝鮮の子」」は次のように伝えている。

在日朝鮮人児童らの生活と教育実態を記録した映画「朝鮮の子」の製作事業は、この間、一時撮影を中止し、脚本を訂正し、1月20日から再び撮影を継続してきたが、資金不足により製作が遅延し、最近ようやくクランクアップ（撮影完了）し、一般公開は最初の予定よりも1ヶ月以上遅延している。それは製作費120万円の大衆カンパが〔2月〕20日現在でも40万円しか集金できていないためだ。この映画の公開に対する期待はきわめて大きく、既に名古屋、京都、大阪、神戸、広島、岡山などではプリントの注文が来ており、東京都内でも毎日のように「いつ公開されるのか」と督促が殺到している。同映画製作委員会では28日頃、3・1大会前夜祭には試写会をもとようと努力しており、3・1中央大会でも公開されるだろうという。

この脚本改訂について呂運珏は「最初は荒井英郎を演出にして少し撮ったけど、この人は少しタッチが優しすぎるんだな。有名な『月の輪古墳』も撮ったりしたけど、あれも少しナイーブだな。だから途中で京極高英を加えて脚本も書きなおした」と述べている（鄭栄桓 2014: 37-38）。このとき書き直した脚本が「改訂稿」【資料2】である。「タッチ」の問題を指摘したのは在日朝鮮人側だろうが、具体的に誰がどの部分をそのように指摘し、スケジュールを立て直してまで抜本的な書き直しを要請したのかは詳らかでない（ただし、次章の脚本分析からおよそのポイントは推察できる）。

映画の完成はおそらく3月中旬以降にずれ込んだ。『解放新聞』（1955. 3. 10）では、「既に製作が完了し、最初の試写会では好評を博しているが、製作費の不足により公開が遅延している」と報じている。その時点で「全4巻」と記されており、実際に公開されたもの（全3巻）よりも多少長かったものと考えられる。事実、『アカハタ』（1955. 3. 14）でも「全4巻」と伝えているのみならず、「駅のホームのかつき屋の老婆」という完成版には存在しないシーンに言及されている。3月下旬以降の記事では全て「全3巻」となっていることから、正式公開は3月半ば以降だったようである。

ところが前述のとおり、その間に都立朝鮮人学校問題に関する運動は、廃校を前提とした条件闘争へと移行していた。さらに間もなく民族組織の路線転換もあった。そのためか「朝鮮の子」の上映運動は活発にはならず、制作費を回収するにもいたらなかった。「金順明氏は借金を返すのに三年くらいかかった」という（鄭栄桓 2014: 38）。

### 2-3. 映画に対する反応

高柳（1995: 211-212）が指摘するように、映画完成のタイミングの問題もあって、

当時この映画を実際に観た人はごく僅かであり、それについて評した文章も多くない。3月上旬の試写会に際しては、評論家の神崎清が『解放新聞』に「よい映画だ。これだけの映画なら安心して誰にでも見せることができると考える」とのコメントを寄せていた<sup>(21)</sup>。観る前はどのようなものかと心配したが、この出来なら心ある日本人に見せられるとでもいうような言い方である。また、前掲『アカハタ』でも、試写版について「何度も眼がしらのあつくなる在日朝鮮人の苦闘の一こま一こまに、日本の父親と母親もまた必ず勇気づけられるにちがいない。なるべく多くの日本の親たちにみせてもらいたい」と伝えていた。

在日朝鮮人運動のなかでは評価が割れた。たとえば李白という人物は、雑誌『新しい朝鮮』に寄せた映画評で「あの苦しい条件のなかで、こんなにっばな映画をつくりあげさせた」とし、『朝鮮の子』がこの日朝・両国民の友好と団結をふかめるのに大きな役割をはたすであろう」と激賞した<sup>(22)</sup>。一方、都立朝鮮人学校問題の当事者の一人であった東京の「一教員」は『解放新聞』の「大衆の声」コーナーに寄稿し、この映画に「大きな失望を感じた」と評した。この教員は、「一貫して日本国民に哀願し「どうかわが教育を守ってください」という卑屈な印象を感じ」る、「闘争の核心的な力」である団結する姿を描けず、ただ生活記録を羅列しているだけだと批判した。また、この映画を観たというおばあさんが「何だか気の毒だ、重苦しいという思いしか生まれぬ」との感想を漏らしたことを紹介した。そして、哀願ではなく正しい教育闘争だけが日本国民にも教訓を与えることができると結論づけた<sup>(23)</sup>。

より専門的な日本の映画人たちの評価でいえば、まず3月31日に教育映画作家協会が研究試写会を開き、30名の会員が集まるなかで他の2本の作品とともに「朝鮮の子」を観た。作家が一堂に会するというのははじめてのことで、「談論風発、和やかで、しかも貴重な批判も出た」というが、残念ながら具体的な「朝鮮の子」評価の中身は不明である<sup>(24)</sup>。『映画旬刊』も年末に短編映画の総合評価を出したが、「解決のむつかしい難問題にふれてはいたが、主張としても作品としても整理が十分でなかった」というごく短い評価を記しただけであった<sup>(25)</sup>。最も詳細に映画評を載せたのは『キネマ旬報』である<sup>(26)</sup>。「月の輪古墳」に比べると「アジプロ調がなく成長」しており、「一方的だが成功作である」という評価の仕方に表れているように、差別問題や政治的なものには無感覚ないし拒否反応を示す評者だったようである。したがって、学校で教える歴史を「朝鮮被害史?」と疑問符付きで要約し、肝心の「敏子」の作文シーンも「我々一般にはハッキリしない」とし、「僕らはどうして朝鮮の教育をうけて悪いのか、と訴えられても観者にもそれは割切れない」と、映画の核心的なメッセージを受け止めきれなかった日本の映画人の心性をよく示す映画評となっている。

こうして、ようやく公開に至った「朝鮮の子」は、上映の不活発さに加え、その内容

を受け止めるべき日本人側の感性の鈍さ、さらには在日朝鮮人側の立場ないし政治路線の違いなどにより、当時は積極的に受容されないまま事実上のお蔵入りになってしまった。

### 3. 脚本からみた映画の変化

本論文では付属資料として2つのバージョンの脚本(資料1および資料2)と公開版映像の文字起こし(資料3)を掲載した。あらためてそれぞれの特徴を述べておけば、次のとおりである。

#### 【資料1】脚本〈初稿〉(「初」と記号化)

最初に荒井英郎を中心に進められていたバージョンと思われる。これをもとに1954年12月22日から1月中旬までは撮影が進められた。

#### 【資料2】脚本〈改訂稿〉(「改」と記号化)

1955年1月に京極高英が中心となって全面的に書き換えたバージョンと考えられる。これをもとに、1月20日から撮影が再開し、編集が進められた。

#### 【資料3】〈完成版〉映画文字起こし(「映」と記号化)

私(板垣)が映画から文字に起こしたものである。脚本〈改訂稿〉と比較対照しやすいように、その様式に合わせて、映像、音声、字幕を文字化したものである。

1本の脚本からつくり得る映画のバリエーションが無数あることは言うまでもない。演出・脚本や出演者をはじめとした製作関係者の能力やこだわりなどに大きく左右されるのみならず、仮に同じ顔ぶれで撮ったとしても、そのときどきの諸条件によって映画の形は変わってくる。逆にいえば、テキストで記された脚本は映画の骨子のようなものであり、無数の情報があらかじめ切り捨てられている。したがって、脚本のテキストを比較対照しただけでは、映画分析のごく一部にしかならない。この点には留意したうえで、以下ではその比較対照をおこなう(それを一覧化したものが図2である)。

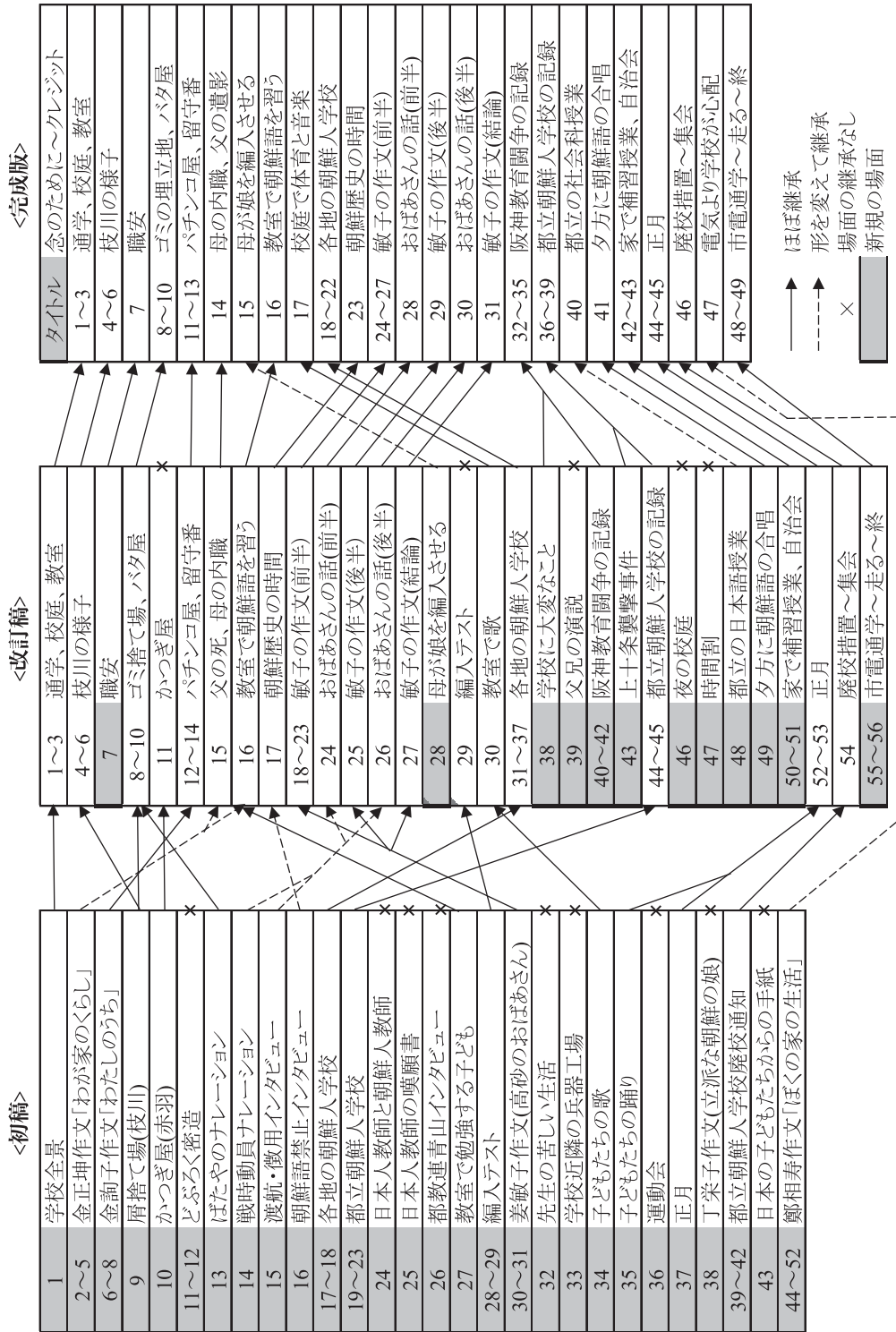


図2 「朝鮮の子」場面対照図

### 3-1. 脚本〈初稿〉と生活記録

荒井英郎を中心に進められた〈初稿〉(資料1)は実際にできあがった作品とは構成もタッチも大きく異なっている。全体の構成を大きく6つに分ければ、表1のとおりである。

表1 〈初稿〉の構成

場面	概要
初01-13	生活の貧しさ
初14-18	朝鮮人学校の形成史
初19-26	「六項目」問題
初27-38	民族学校の意義と学校の様子
初39-43	廃校方針とそれに対する抵抗・連帯
初44-52	貧しくても勉強だけは不自由したくないとの思い

「朝鮮の子」は製作当初より子どもらの作文をベースとした作品と銘打っていた。たとえば前掲のチラシは「朝鮮の子供たちの綴った生活記録を映画化」したものだとしているし、〈完成版〉の映画冒頭でも「この映画は朝鮮人学校の子供たちが綴った生活記録です」とタイトルを入れており、子どもらが語りを担当していた。おそらく山形県の中学校教師、無着成恭が子どもらの作文集『山びこ学校』(1951)を出し、今井正監督がそれを映画化したこと(1952)も1つのモデルを提供していたと考えられる。この〈初稿〉が重要なのは、子どもの作文を使った部分についてその著者名などが明記されていることである。と同時に重要な点は、〈改訂稿〉や〈完成版〉の語りが全て子どもの声による作文朗読という形式をとっていたのに対し、〈初稿〉の語りは子どもの作文朗読(資料1において二重カギ括弧でくくられた部分)とナレーション(山括弧でくくられた部分)から構成されていたことである。すなわち、教育実践の現場から出てきた語りと映画製作側の解説や意味づけとを区分することができるのである。

まず、〈初稿〉中に作文から取ったことが明記されている5人の名前について整理したのが表2である。金政坤<sup>キムジョンゴン</sup>と金詢子<sup>キムスンジャ</sup>の作文は同じ都立第二小の作文集に掲載されたものである。朝鮮人の家庭の苦しい実情を描いた作文で、部分的に省略はされているが、ほぼそのまま〈初稿〉に反映されている。姜敏子の作文は本稿冒頭で述べたものであ

表2 〈初稿〉で用いられた作文

場面	<初稿>での記述	原典	所収
初02-05	都立第二朝鮮人小学校六年 金政坤 「わが家のくらし」	金政坤(6年)「わがやのくらし」 東京都立第二朝鮮人小学校『作文集』第1号	朴慶植(2000:295-296)
初06-08	二年 金詢子 「わたしのうち」	金詢子(2年)「おかあさん」 東京都立第二朝鮮人小学校『作文集』第1号	朴慶植(2000:293)
初30-31	姜敏子	姜敏子(東京都立朝鮮人中学校)「祖国はどこ——在日朝鮮人学童の作文——」(『歴史学研究別冊朝鮮史の諸問題』1953年)	
初38	丁栄子	-	-
初44-52	都立第八朝鮮人小学校六年 鄭相寿	-	-

り、また次章でもより詳しく論ずるので、ここでは省略する。<sup>チヨンヨンジャ</sup>丁栄子は所属も書かれておらず、〈初稿〉にしか登場しない作文であり、原典をまだ探し出せていない<sup>(27)</sup>。  
<sup>チョンスン</sup>鄭相寿は所属が明記されているが、原典となった作文集はまだ見つけれられていない。

逆にいえば、脚本の残りの部分は実際の作文を素材とした形跡が見られない。〈初稿〉の全体52場面のうち作文が原典であるのは19場面であり、割合でいえば4割に満たない。子どもたちの作文が重要な位置を占める映画であることは間違いないが、作文を構成してできた映画とは実はいえない。

もっとも作文に限定せず、この頃の朝鮮人学校の教育実践が反映された場面という点でいえば、その範囲は広がる。たとえば日教組の全国教育研究大会で報告された事例が脚本に取り入れられている[初28]。朝鮮人学校に編入するために入学テストを受ける「田中春子」と教員とのやりとりのシーンである。〈初稿〉には「この例は第三回教研大会に発表されたもの」と記されているが、これは1954年1月22-24日に開催された日教組の第3回全国教研大会のことである。在日朝鮮人教育の問題が全国教研大会で正面から取り上げられたのは前年に開かれた第2回のときの梶井陟報告からだが(梶井1974)、第3回ではいくつかの部会で報告があった<sup>(28)</sup>。この編入テストのエピソードは小冊子『民族の子』(朝教組1954:2-3)に「児童の精神生活」の一例として抜粋紹介されており、それが「朝鮮の子」脚本のもとになったと考えられる。

こうした教職員組合運動を通じた連帯の痕跡は他にも見られる。たとえば「都教連の青山先生」から「日本の民主的な教育に対する圧迫」という観点から朝鮮人学校問題を語ってもらうことも計画されている[初26]。これは当時、東京都教職員組合連合の委員長だった青山良道(1914-1986)のことだと考えられる。日教組は第34回中央委員会(1954年10月5-6日)で朝鮮人学校の「廃校反対、交渉継続」の決議をおこない、都教連が同年10月18日に学校廃校反対の声明を発表していた<sup>(29)</sup>。そうした組織的な連携が〈初稿〉に表れていたものと思われる。

おそらく、そのような関係性の産物として、日本人と朝鮮人とのつながりも盛り込まれている。たとえば都立化して民族課目が課外になり、日本人と朝鮮人が「反目」しあう状況になっても、それを「のりこえて、日本人の先生たちからも六項目実施反対の声」が起こったとのナレーションを挿入している[初25]。また、「日本の友だち」から「戦争反対」という脈絡において都立朝鮮人学校廃止に反対する手紙が届いたとのエピソードも紹介されている[初43]。このような「反戦」を通じた日朝連帯に関わる場面としては、朝鮮学校の隣にあった「米軍用の兵器工場」(おそらく北区上十条の中学校・高等学校に隣接した東京兵器補給廠のこと)を描こうとした場面もある[初33]。

また、作文朗読でもナレーションでもなく、在日朝鮮人に対するインタビューが想定されていたシーンもあった。枝川の朝鮮人からは、植民地時代に土地を取り上げられ、

戦時期に強制動員されたり「慰安婦」とされたりしたエピソードを語ってもらおうとしていたほか [初 15], 朝鮮語を禁止されたり教育を受けられなかったりした女性のインタビューも計画されていた [初 16]。すなわち日本の朝鮮植民地支配史の要点を枝川在住の人たちに語ってもらおうとしていたのである。

このように〈初稿〉は、子どもたちの作文を素材として用いながらも、より解説的な語りや、日本人とのつながりが見られるシーンなどが加えられることが企画されていた。これにもとづいて1954年末から撮影を進めていたが、1月に入り、その内容に対する不満が出て書き換えることになった。

### 3-2. 脚本〈改訂稿〉での書き換え

〈改訂稿〉(資料2)の全体的な構成は表3のとおりである。〈初稿〉と大きく異なり、実際にできあがった作品にかなり近い。

表3 〈改訂稿〉の構成

場面	概要
改01-17	枝川の貧しい生活と学校
改18-29	日本の学校から朝鮮人学校への編入
改30-46	朝鮮人学校の歴史(都立6項目問題まで)
改47-54	廃校通知までの学校と枝川の様子
改55-56	朝早く電車で通学する子ども

最大の変化は、〈初稿〉ではナレーションやインタビューとなっていたところが、子どもの声による朗読などに代替されたことである。その結果、実際の子どもの作文と製作者の語りとが弁別できないようになっている。〈改訂稿〉で子どもの声による語りとなっている箇所を一覧にしたものが表4である。まず、作文が素材だったシーンについていえば、②金詢子作文 [初 06-08] は、ことばづかいをかえて引き継がれた [改 12-14]。③金政坤作文 [初 02-05] は、父が徴用で亡くなり母が内職をしているという設定で、原型をほぼとどめない形で引き継がれた [改 15-16]。詳しくは後述するように、④・⑤の姜敏子作文 [初 30-31] は作文の授業の再現として描き直されただけでなく、〈初稿〉でナレーションやインタビューとして盛り込もうとしていた内容 [初 14-15] が「神戸のおばあさん」の語りとして組み入れられた [改 18-27]。それとともに朝鮮語を禁止された経験を語るインタビュー [初 16] は、朝鮮歴史の授業シーンへと変更された [改 17]。丁栄子と鄭相寿の作文 [初 38, 44-52] はこの段階で消えた。①・⑥・⑦は、もともと説明的なナレーションだったところを子どもの語りへと変更したものであり、⑨は新規に追加されたエンディングである。こうして〈改訂稿〉では、ほぼ全編が子どもの朗読によって構成された体裁となったが、実際の作文をベースとした場面の割合はむしろ減った。



表4 〈改訂稿〉で子どもの語りとなっている場面の対照表

	<初稿>	内容	<改訂稿>	子どもの語りの内容
①	初01, 09	在日朝鮮人の生活	改01-08	在日朝鮮人の生活
②	初06-08	金詢子作文	改12-14	パチンコ屋と留守番
③	初02-05	金政坤作文	改15-16	父の死、母の内職、教育
④	初30-31	姜敏子作文	改18-23, 25, 27	敏子の作文朗読
⑤	初14-15	植民地史と渡航史	改24, 26	(敏子の作文再現シーン)
⑥	初17-18	各地の朝鮮人学校	改31-37	各地の朝鮮人学校
⑦	初19-23	都立朝鮮人学校	改40-46	阪神教育闘争～都立朝鮮人学校
⑧	初35, 37, 39-42	都立の廃止通告まで	改47-54	都立の廃止通告まで
⑨		-	改55-56	市電通学～走る～終

また、いくつかの場面で映像素材について具体的な情報が盛り込まれている。各地の朝鮮学校のシーン [改 31-37] のうち、特に九州では具体的な記述があるが [改 37]、これは初稿をベースに各地で撮影した素材の一部だと思われる。阪神教育闘争から「6項目」問題までの記録映像 [改 40-46] は、阪神教育闘争 (1948. 4)、朝聯解散にともなう学校接収 (1949. 9)、上十条の3・7事件 (1951. 3) については「ニュース」<sup>(30)</sup>、6項目問題については「民戦ニュース」を素材にすると書かれている。廃校通知とその後の対策 [初 39-42] については、PTA、教同、朝教組の会合の場面を見せながらそこでの発言をアフレコで盛り込むかたちになった [改 54]。ちょうど年末年始をはさんでロケ撮影がおこなわれたためか、正月のシーン [初 37] は具体的に書き改められた [改 52-53]。

この間に新たに盛り込まれた要素や消えた要素もある。オープニングとエンディングの通学シーン [改 01, 55-56] のほか、職業安定所の場面 [改 07]、阪神教育闘争のときの抗議の演説 [改 39] は付け加わった。一方、どぶろくの「密造」の場面 [初 11-12]、日本人とつながりに関連した場面 [初 24-26, 43]、先生のひどい暮らし [初 32]、学校近隣の兵器工場 [初 33] の場面は消え去った。

以上述べた〈初稿〉から〈改訂稿〉への変化をまとめれば次のとおりである。1954年12月下旬から翌年1月中旬にかけて撮影自体は脚本初稿をベースに進められていたことから、既に撮った素材のうち使えるものは脚本改稿版に具体的に盛り込んだものと考えられるが、内容は大きく変わった。まず、京極高英を中心とした〈改訂稿〉の執筆者は、作文を基礎にした語りも脚本執筆者による解説的なナレーションも合わせて子どもの作文朗読形式に作り替えた。貧しい生活についての描写は映画の最初の方だけに固め、それが朝鮮人に対する差別と圧迫の結果であることをより分かりやすくした。日本

の人々を「仲良くしなければならぬ」対象としては描いたが〔改51〕、都立朝鮮人学校をめぐる日本人と朝鮮人の政治的連帯は背景に退けた。このような書き換えの結果、日本人を観客に想定していたと考えられる説明的な語りや日本人とのつながりの場面よりも、文字どおり「朝鮮の子」たちの視点や同胞の闘いの歩みに比重が置かれることになった。その分、実際の作文をベースにした部分の比率はむしろ減ったが、朝鮮人学校側の視点はより強まったと考えられる。

### 3-3. 〈完成版〉へ

〈改訂版〉から〈完成版〉までのあいだに順序が入れ替わったり部分的にシーンがなくなったりはしているが、構成要素や大枠の話の流れはさほど変わらない。それでもいくつか重要な変化があるので、やや羅列的にはなるが、その諸点について述べておこう。

まず、冒頭に「念のために」ではじまるメッセージが挿入された。映画製作当時は都教委と学校のあいだに「誤解や感情の問題」があって「多少気にさわることも」あるだろうが、「今ではこのようなことはなくなって」おり、「われわれ」は一日も早く日朝が国交を再開し両国民の友好が強められることを願う、という趣旨のものである。高柳(1995:213)は、これを「総聯への路線転換からまもない時期に、自分たちで所有しているフィルムにだけ付け加えたもの」と解釈している。とすれば作品が完成して公開されたあとになって、1955年5月以降に付け加えられたということになる。その可能性もある。それとともに、3月中旬頃まで編集作業が進められていたことを考えれば、都立朝鮮人学校の各種学校化という着地点が見えて、編集の最終段階(3月)でフィルム冒頭に挿入された可能性もある。実際、〈改訂稿〉では存在していた「国交調整までの廃校延期」論〔改39〕が〈完成版〉では消えており、2月以降の都立朝鮮人学校運動の戦略変化が反映されているからである。

さらに、教研大会で報告された事例をベースにした編入生と教員との会話のシーン〔初28-29, 改29〕は、それ自体としては消え去った。もとの事例では、日本の学校に行っていた子に対して先生が詰め寄っている感じがあったが、その辺を嫌がったのかもしれない。実際、女の子が朝鮮人学校に編入されてくるシーンは残り〔改28, 映15〕、先生が「よく勉強しようね」と温かい声をかけ、子どもたちが笑顔で迎え入れる光景が映し出されている。

あとは細かい変化である。〈初稿〉にあって〔初44-52〕、〈改訂稿〉では消えて、〈完成版〉では再び用いられ要素〔映47〕がある。鄭相寿の作文である。〈初稿〉よりも大幅に短くはなっているが、エンディングの手前のシーンに挿入された。また、「かつぎ屋」〔改11〕のシーンがなくなっているが、違法行為を映像化することをためらった可

能性がある。既に酒の「密造」シーン [初 11-12] が〈改訂稿〉の段階で消えていたが、それもそうした観点からだったものだと考えられる。

場面要素ではないが、2種類の脚本では存在していなかった朝鮮語の台詞が完成版の各所で発せられていることにも注目しておく必要があるだろう。編入シーン [映 15]、朝聯時代の授業シーン [映 16-17, 23-31]、都立時代に課外で朝鮮の歌を歌うシーン [映 41]、ラストの子どもたちのシーン [映 49] である。映画全体の脚本が日本語で書かれていた一方で、出演者が用いる撮影用の朝鮮語台本が部分的にあった可能性がある。その結果、あとで考察するように、朝鮮語音声と日本語字幕の内容が若干ズレる部分も生ずることになった。

こうして見ると、映画にはいくつかあり得る形があったと思われる。歴史に「もしも」はないとよく言われるが、結果論的にはそうであるとしても過程論的には十分「もしも」があり得る。都立朝鮮人学校をめぐる運動の方向性が1954年12月と1955年2月に大きく変わるが、完成時期が3月よりも早かったら、映画はまた別の形をとっていたこともあり得た。逆に、もっと遅くなっていたら公開にいたらなかった可能性もある。また荒井英郎が中心となっていたバージョンが大きく変更されていなかったら、やはりだいぶ違った作品となっていたであろう。こうした数々の「もしも」の過程のバージョンとして、現在私たちが目にするのできる「朝鮮の子」がある。

#### 4. 「敏子」の作文シーンと朝鮮人学校の教育実践

ここまでは映画の製作過程全般を論じてきた。以上を踏まえて、冒頭で提示していた問いに戻ろう。「敏子」の作文シーンはどのように成立し、そこに「神戸のおばあさん」が語る渡航史の話がどのように入ったのか。

原型はまちがいなく都立朝鮮人中学校生徒だった姜敏子の作文である。姜敏子は、作文で記されているように1936年に大阪の猪飼野で生まれ、間もなく家族で兵庫県曾根町（現・高砂市）に引っ越した。戦後、東京へ引っ越し、荒川区の小学校を卒業したのちに、もう一度朝鮮人小学校の6年生として編入した。となると都立朝鮮人中学校への入学は1950年のことになると思われる。ちょうどこの頃、子どもらに生活綴方を日本語や朝鮮語で書かせることは朝鮮人学校の重要な教育実践ともなっていた（呉永鎬2017）。この「高さのおばあさん」の登場する作文が『歴史学研究 特集号』（1953）以前に朝鮮人学校の作文集などに載ったのかどうかは確認できていない。ただ、その後は複数媒体に転載された作品であり、日本の小学校と朝鮮人学校の両方を知る子どもが綴った日本語作文として重要視されていたものと思われる<sup>(31)</sup>。

この作文が載った『歴史学研究 特集号』には、旗田巍、山辺健太郎のような歴史学

者、<sup>ホナムギ</sup>許南麒などの作家と並んで、当時都立朝鮮人中学校で教鞭をとっていた朴慶植、<sup>リン</sup>林光澈グワンチョルが書いていた。姜敏子の作文の掲載にあたっては「朴慶植氏の働きかけがあった」（高柳 1989 c: 48）という。この作文で出てくる「高さごのおばさん」のエピソードは、姜敏子が戦前に曾根町の小学校に在学していたときの経験を回顧したものである。彼女が自らの朝鮮人認識を改めたのは、この「おばさん」の語りを聞いたからではなく、朝鮮人学校に入って歴史を学んでからだと言っている。まさに朴慶植や林光澈らの教えを受けたという意味かと思われる。ただ、そこで教えられた内容は、日本に渡ってくる前に「日本の悪いおじさん達」に「奴隷のように」こきつかわれ、それでも生きていけないから日本の地に流れてきたという渡航史ではあったが、そこに戦時強制動員のエピソードは含まれていない。

脚本の〈初稿〉では、編入生としての姜敏子が朝鮮人学校に入る前の経験を綴った作文（日本語）の朗読が入り〔初 30〕、その後、敏子が朝鮮語を練習する〔初 31〕という流れになっている。ただ、ここでも戦時強制動員の話は出てこない。その話は、作文とは別に、「日本に来た時の思い出を語る部落の朝鮮人」のインタビュー〔初 15〕として想定されていたものである。「悲惨な生活ぶり」が描かれたのち〔～初 13〕、ナレーション〔初 14〕を経てインタビュー〔初 15〕が入るという流れになっている。すなわち、「悲惨な生活」のそもそもの源流として植民地期における土地の取り上げ、出稼ぎ、トラックや手錠による連行、「徴用」という名の「慰安婦」などが語られることが企画されていたのである。

脚本〈改訂稿〉になると、インタビューで想定されていた内容は、「神戸のおばあさん」の口で語られることになる〔改 24, 26〕。「子供たちが綴った生活記録」（冒頭タイトル）としての映画の性格を強めるために、インタビューよりも作文内容の再現映像という形式によって渡航史を語ることにしたのだと考えられる。高砂が神戸になったのはただ関東の人にはその地名の方が分かりやすかったからだろうし、「おばさん」が「おばあさん」になったのは年配者の方が渡航史の語りに重みが出るからであろう。一方、敏子は「歴史を学ぶ中で、何故、朝鮮人である私が見知らぬ土地で生まれなければならなかったかを知った」とも語っており〔初 25〕、改心したのが「おばあさん」の語りによってなのか学校の歴史教育によってなのか、必ずしもはっきりしない作りになっている。

そして〈完成版〉になると、作文が朝鮮語になる。ただ、朝鮮語で語られたことと日本語字幕には重要な点ズレがある。日本語字幕では、「神戸のおばあさん」が「子供にはなんの罪もないよ みんなそんな考えになってしまったんだよ」と語りはじめることになっている〔映 28〕。しかし、朝鮮語の音声にはそのような前置きはなく、最初からライフストーリーを語りはじめている。すなわち、日本語字幕を見ていると、「神戸

のおばあさん」は孫娘の卑屈な考え方の根源に植民地史があることを先に示唆したうえで語りを開始するのである。また、「おばあさん」の話を聞いた敏子は、朝鮮語では「歴史を学ぶなかで、朝鮮人である私がなぜ見知らぬ日本の土地で生まれなければならなかったかを知りました」と語っている〔映29〕。しかし、日本語字幕では下線部の「歴史を学ぶなかで」が省かれているため、日本語で映画を理解する者の目には、この場面は彼女が「神戸のおばあさん」の語りを聞いて認識を改めたシーンとして映る。〈改訂稿〉では語りを聞いて改心したのか学校で歴史を勉強して改心したのか分からなかったところ、〈完成版〉の字幕では前者の側に整理したのである。そのことにより、「神戸のおばあさん」の語りの重みがぐっと増した。

このように、このシーンは、姜敏子の作文が原型になりながらもこのような変遷を遂げてできあがったものであった。しかし、「神戸のおばあさん」のシーンは単なる映画製作者たちによる「創作」だったとして片付けてよいものなのか。私はこれが朝鮮人学校の教育実践とそれを取りまく状況の一端を映像化したものだと考えている。というのも都立朝鮮人学校の社会科教育ないしは人間教育において、戦時期の強制動員を含む在日朝鮮人渡航史が重要な要素だったからであり、またそのことが日本人教育者にも一定の影響を及ぼしていたからである。実際、姜敏子が作文のなかで朝鮮人認識の転機として語っていたのは、渡航史を知ったことにあった。これは、まさに東京朝鮮中高で社会科の教鞭をとっていた林光澈や朴慶植がこの頃書いていた論文や、学校での教育実践に関わるものであった。この点を最後に考察しておこう。

まず林光澈からいえば、東京朝鮮中高に1946年から勤め、都立時代も事実上の校長として勤務し社会科を受け持ってもいた<sup>(32)</sup>。また論文としても「渡航史」(林光澈1950)のほか、先ほど述べた『歴史学研究 特集号』でも「在日朝鮮人問題」(林光澈1953)を発表しており、近代資本主義-日本帝国主義の発展史のなかに民族問題を位置づけていた。その歴史のなかに、もちろん戦時期の強制動員のことも含まれていた。こうした論文は姜敏子の「日本の悪いおじさん達」という語りとも共鳴するものである。

朴慶植は既に述べたように姜敏子作文の『歴史学研究 特集号』掲載に力添えした。その後、「朴慶植」の名で日教組第3回全国教研大会(1954. 1. 22-24)の第6分科会において「朝鮮人学校に於ける歴史教育」を報告した(朴慶植1954 a)。そのなかで朴慶植は「当面の問題-子供の意識-」として、「政治的・経済的圧迫」という客観的条件のもと、朝鮮人中学校に入学した生徒57名中31名までが「過去日本人であったならという考えをもっている」ことを報告するとともに、「附録」として姜敏子の作文を含む「祖国はどこ」を抜粋して掲載した。そのような「生徒自身の生活環境から出発し、またそこに帰着して人間改造、社会変革の歴史教育」をすべきだと論じている。

在日朝鮮人渡航史を語ることは、民族学校の教育実践のなかで意義を持っていただけ

ではない。その語りは、当時も今も、在日朝鮮人および民族教育の存在理由についても植民地史についても必ずしも理解しているとはいいがたい日本人に向けられてもきた(板垣 2015; 이타가키 2017)。実際、都立朝鮮人学校教員たちの活動は当時の日本人の教育運動にも一定の影響を及ぼしていた。特に、戦後に創立された歴史教育者協議会(以下「歴教協」と郷土教育全国連絡協議会(以下「郷土全協」)にはっきりとその痕跡を残している。歴教協は戦前の歴史教育に対する反省のうえに立って1949年に創立された団体であり、一方の郷土全協は、レッドパージで教職を追放された桑原正雄を議長として、「郷土の現実」を調べるといふ新たな歴史・地理の教育運動の担い手として1953年に結成された団体であった(桑原 1976)。朴慶植の全国教研大会における報告(上述)は、同じ題目で歴教協の雑誌『新しい歴史教育』に活字化された(朴慶植 1954 b)。また、歴教協と郷土全協が共同で立ち上げた雑誌『歴史地理教育』創刊号には、歴史教育者の鈴木亮(1954)が「なぜ日本には朝鮮人がたくさんいるか」との論文を寄稿した。在日朝鮮人の渡航史や生活史の概要を記した論文だが、末尾に「資料を朴慶植先生に提供していただいて、鈴木亮が書いた」と明記しており、当時の歴史教育実践の横のつながりを垣間見ることができる。この鈴木論文を1つの基礎としながら、桑原正雄は郷土の歴史と地理を調べるための手引き書『郷土をしらべる』(桑原 1955)のなかに在日朝鮮人史を組み込んだ。すなわち桑原は「9戦争のかなしみ」のなかに「朝鮮の人たち」という項目をもうけ、渡航してきた経緯や地域で労働者として働いた朝鮮人のことを描いた。こうして在日朝鮮人渡航史が「郷土」に関する新たな生活史の叙述にも入り込むことになった。

以上の諸点からすれば、「敏子」の作文シーンは、姜敏子の経験を基礎にすえながら、当時の朝鮮人学校の教育実践とそれをめぐる教育運動を形象化したものと考えられるべきである。このように「朝鮮の子」とは、ただ作文が映画として構成されたというのではなく、当時の民族教育をめぐる状況が映像化された作品だったのである。

## 5. おわりに

ここまで、都教委による都立朝鮮人学校の廃校通知(1954. 10)から廃校(1955. 3)にいたるまでの短期間に映画「朝鮮の子」が形づくられていったプロセスを見てきた。「朝鮮の子」は、民族教育運動(都立朝鮮人学校→朝鮮学校)、戦後教育運動(日教組、歴教協・郷土全協)、映画運動(在日朝鮮映画人集団、記録教育映画製作協議会)、対抗政治(民戦→総聯、日本共産党:五全協路線の自己批判)、政府(日本政府、都教委)の流れのなかにあって、その転換点となる時期(1955年)の渦中で製作された。関連する諸団体の概要を図示すれば図3のとおりである(大まかな主体別に縦割りとし、縦

割りをまたがる関係については、より組織的な場合に実線、より個人的な協力関係の場合に点線で結んだ。「朝鮮の子」製作委員会の関係者は破線で囲んだ。

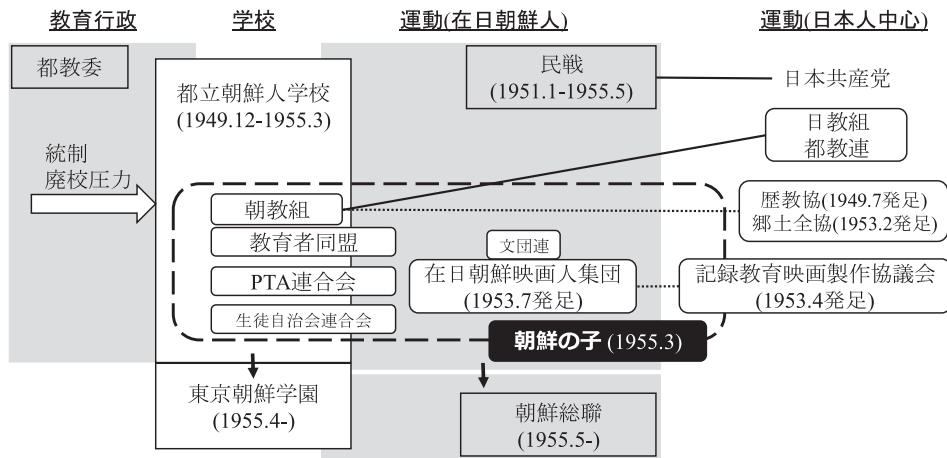


図3 「朝鮮の子」をめぐる構図

この映画は、冒頭に「この映画は朝鮮人学校の子供たちが綴った生活記録です」と表示され、ナレーションも全て子ども作文朗読の形式で組まれているが、全て実際の「生活綴方」の作文をもとに構成された作品ではない。全体としては、東京都立朝鮮人学校廃校問題をきっかけに、朝鮮人学校の意義や在日朝鮮人の置かれた状況を（主に）日本人に理解させるために製作された映画である。だからといって、これが「記録」ではないという単純な話でもない。そもそも当時の「生活綴方」からして、そこで書かれた内容は単に子どもの実態というよりは教師と子どもの関係性のなかで生まれた「記録」であった。そう考えると、ロケ撮影した学校や生活現場の生々しさも相まって、この映画自体が当時の在日朝鮮人教育をとりまく関係性をリアルに反映した「記録」であったと見ることができる。「敏子」の作文シーンもまさにそうした関係性の産物だった。

民族教育と在日朝鮮人運動をめぐると状況が刻一刻と変わるなか、シナリオも変容をとげていった。といっても、映画「外部」の何らかの政治路線が単純に作品「内部」に貫徹されたともいえない。荒井英郎が中心となって書いた〈初稿〉に対して製作委員会において不満が出て、京極高英を中心に〈改訂稿〉を書いて撮り直すことになったが、その際に直接的な政治メッセージが挿入されたわけでもなかった。〈初稿〉で目立っていた在日朝鮮人の「悲惨」さや日朝友好シーンが相対的に後景へと退き、語りを全て子どもたちの声として構成しなおし、在日朝鮮人の主体性がより強調されることになった。ただ、これも時間との勝負で公開に至ったものであって、今観ることができる作品は数々の可能な完成形の一つのバリエーションを示すものである。

時代も政治状況も異なるとはいえ、今日の朝鮮学校もまた政府の圧力、在日朝鮮人運

動と支援その他に関わる日本人という関係性のなかに置かれている。だからこそ60年以上もの歳月を経てもなお「朝鮮の子」は喚起力を失わないのである。

※本研究は JSPS 科研費 JP16H03481 の助成を受けたものである。呉永鎬さん（世界人権問題研究センター）、金理花さん（東京外国語大）には一部の資料を提供していただいた。資料3の作成にあたっては、板垣ゼミの大学院生にチェック面で協力してもらった。脚本の写しを提供してくださった方は匿名を希望しておられるので、ここでは明かさない。この場を借りて感謝を捧げたい。

#### 注

- (1) 本稿では慣例にならない、「製作」と記すときには、企画立案や製作費集めなど映画づくりの全過程を示すものとする。それに対して「制作」は、映画を撮影する作業など、作品を創造する実作業であり、「製作」過程の一部を成す。「制作」の方が新しい用語であるため、本稿では当時の状況を反映してほとんどこの語を用いることはない。
- (2) 「東京都立朝鮮人学校設置に関する規則」（東京都教育委員会規則第13号、1949年2月20日）。東京都教育庁学務部『東京都立朝鮮人学校に関する資料』（1954. 6, pp.2-5）にまとめられた法規による。
- (3) 朝教組（1954：16-17）および東京都立朝鮮人学校 PTA 連合会『朝鮮人弾圧事件の真相を訴う』（1951. 3. 16, 朴慶植（2000）所収）。
- (4) 都教委教育長→都立朝鮮人学校長「都立朝鮮人学校の運営について」（教学発第169号、1951年4月11日）、前掲『東京都立朝鮮人学校に関する資料』pp.6-7。
- (5) いわゆる「6項目」などこの時期の「合意」文書については、前掲『東京都立朝鮮人学校に関する資料』pp.8-18。
- (6) 1954年度後半における朝教組の運動路線については、東京都立朝鮮人学校教職員組合「第五回臨時総会 斗争経過報告書 一九五四年九月三〇日～一九五五年三月」（c 1955年、朴慶植（2000）所収）を参照。
- (7) 「조선 민주주의 인민 공화국 남일 외무상 성명 발표／일본에 거주하는 조선인들에게 대한 일본 정부의 비법적 박해를 반대 항의하여」『로동신문』1954. 8. 31。
- (8) 「대일 관계에 관한 조선 민주주의 인민 공화국 외무상의 성명」『로동신문』1955. 2. 26。
- (9) 『解放新聞』1955. 6. 2。
- (10) 『解放新聞』1954. 6. 10に第1集完成の記事が載っており、6月24日に日比谷公会堂で開催された「6. 25 第4週年記念大会」でも上映された（『解放新聞』1954. 6. 22）。
- (11) 復刻版『教育映画作家協会々報』付録15, 不二出版, 2017年, pp.30-31に収録されている。
- (12) 『記録映画教育映画 製作協議会ニュース』No.1（1953. 4. 10）より。
- (13) 『教育映画作家協会々報』No.1（1955. 3）。
- (14) 滋賀県立大学付属図書館・朴慶植文庫所蔵。
- (15) 文団連は民戦4全大会にもとづき準備が進められ、1954年5月に結成された。既在日朝鮮文学芸術家総会として連携していた文学、美術、音楽、舞踊、演劇、映画の6団体に加え、学術団体や各地の文化団体を網羅したもので、在日朝鮮映画人集団もその傘下団体となった（『解放新聞』1954. 5. 20；朴慶植編『在日朝鮮人関係史料集成〈戦後編〉』第8巻, 不二出版, 2000年, pp.377-383）。
- (16) 東洋映画社は、1954年11月に開催された民戦5全大会で、「祖国を守る人々」などを上映してきた中央映画運営委員会を解散し、新たに祖国映画や自主製作映画を上映する組織として創設されたものである（『解放新聞』1954. 12. 16）。
- (17) 『解放新聞』1955. 1. 15。
- (18) 都立朝鮮人学校での役職は、동경도립조선인고등학교・동경도립조선인중학교 PTA『一九五三 년도 학교보고서』（1954. 6. 21現在, 朴慶植（2000）所収）による。全国組織での役職は、公安情報に



なってしまうが坪井(1959:535-536)による。

- (19) 前掲『解放新聞』1955. 1. 15。
- (20) 『朝教組ニュース』No.9 (1955. 1. 29)でも2月上旬公開という情報を伝えていた。
- (21) 『解放新聞』1955. 3. 10。
- (22) 李白「映画評 記録映画朝鮮の子」『新しい朝鮮』7号, 1955. 5. 1。
- (23) 『解放新聞』1955. 3. 26。
- (24) 『教育映画作家協会々報』No.3, 1955. 5. 1。当日の記録は40枚ほどの原稿にして雑誌『視聴覚教室』に投稿したとあるが、掲載された様子はない。
- (25) 滋野辰彦「昭和三十年の短編映画」『映画旬刊』No.6 (1955年12月下旬号)。
- (26) 『キネマ旬報』118号, 1955. 5. 1。
- (27) ただし『朝教組ニュース』No.9 (1955. 1. 29)に、「朝中一年 丁栄子」の「杉の木のように」という作文が掲載されており、同一人物だと思われる。
- (28) 『朝教組ニュース』No.5 (1954. 2. 21)にその報告がある。
- (29) 『朝教組ニュース』No.7 (1954. 10. 30)。
- (30) この「ニュース」が何を意味するかは不明だが、高柳(1995:208)によれば学校閉鎖の場面は『日本ニュース』第198号(1949. 10. 25)を使用しているという。
- (31) 조선인교육자동맹 편『아동작품집 - 현상모집당선작품 - 1953년판』(학우서방, 1953)には、3等入選作として姜敏子(東京都立朝鮮人中学校3学年)の「나의 동생」という作品が収録されているが、これは内容が異なる。『歴史学研究 別冊』以降でいえば、姜敏子の作文は『民族の子』(朝教組1954:1)の冒頭に部分収録され、後述のように、朴慶植が日教組の第3回全国教研大会(1954. 1)で発表した「朝鮮人学校に於ける歴史教育」(朴慶植1954)の附録としても部分収録された。さらにその後『また逢う日には:朝鮮学生の手記』(南日龍編, 理論社, 1961年)にも「高さごのおばさん」との題で収録された。
- (32) 都立朝鮮人高等学校・中学校の『학교보고서』1952, 1953年度版(朴慶植2000所収)で林光澈は「校長」と記されている。

## 参考文献

### 【日本語】

- 板垣竜太(2015)「植民地支配責任論の系譜について」『歴史評論』784: 17-28.
- 呉永鎬(2017)「朝鮮学校の生活綴方:東京都立朝鮮人高等学校『新芽文集』(1952年)を読む」『教育史フォーラム』12: 67-87.
- 小沢有作(1973)『在日朝鮮人教育論 歴史篇』亜紀書房.
- 梶井陟(1974)『朝鮮人学校の日本人教師』増補改訂版, 亜紀書房.
- 上倉泉(2003)「日本の同時録音の移り変わり」『日本大学芸術学部紀要』37: 23-29.
- 金徳龍(2002)『朝鮮学校の戦後史:1945-1972』社会評論社.
- 桑原正雄(1955)『郷土をしらべる:みんなでやろう』国土社(みつばち文庫).
- (1976)『郷土教育運動小史:土着の思想と行動』たいまつ社(たいまつ新書).
- 佐藤洋(2017)「感性の記録をみる:記録映画作家協会々報」解説『復刻版 記録映画作家協会会報』別冊, 不二出版, pp.29-61.
- 坂本裕文(2017)「解説『作家協会会報』と、一九五五～一九六四年までの記録映画運動について」『復刻版 記録映画作家協会会報』別冊, 不二出版, pp.5-27.
- 鈴木亮(1954)「なぜ日本には朝鮮人がたくさんいるか」『歴史地理教育』創刊号: 36-42.
- 高柳俊男(1989 a)「枝川の歴史をつくった人びと:在日朝鮮人一世の証言から ⑬映画『朝鮮の子』とその時代(その一)」『記録(記録の会)』124: 27-31.
- (1989 b)「枝川の歴史をつくった人びと:在日朝鮮人一世の証言から ⑭映画『朝鮮の子』とその時代(その二)」『記録(記録の会)』125: 38-42.
- (1989 c)「枝川の歴史をつくった人びと:在日朝鮮人一世の証言から ⑮映画『朝鮮の子』とその時

- 代(その三)』『記録(記録の会)』126: 46-50.
- (1989 d)「枝川の歴史をつくった人びと: 在日朝鮮人一世の証言から ⑯映画『朝鮮の子』とその時代(その四)』『記録(記録の会)』127: 46-50.
- (1989 b)「枝川の歴史をつくった人びと: 在日朝鮮人一世の証言から ⑰映画『朝鮮の子』とその時代(その五)』『記録(記録の会)』128: 57-61.
- (1993)「映画『朝鮮の子』とその時代」, 坂崎武彦編『動く絵の作家 荒井英郎』講談社出版サービスセンター, pp.147-174.
- (1995)「映画『朝鮮の子』: 民族教育の原点として」『ほるもん文化』5: 197-215.
- 朝教組(東京都立朝鮮人学校教職員組合)(1954)『民族の子: 朝鮮人学校問題』東京都立朝鮮人学校教職員組合)情報宣伝部.
- 鄭栄桓(聞き手)(2014)「インタビュー 現代史を朝鮮映画人として生きて: 総聯映画制作所・呂運珏顧問に聞く」『人権と生活』38: 32-41.
- 坪井豊吉(1959)『在日朝鮮人運動の概況』法務研究報告書 46(3), 法務研修所.
- 朴慶植(1965)『朝鮮人強制連行の記録』未來社.
- [朴慶植名義](1954 a)「朝鮮人学校に於ける歴史教育」日教組第3回全国教育研究大会第6分科会発表要項, 朴慶植 2000所収, pp.166-174.
- (1954 b)「朝鮮人学校における歴史教育」『新しい歴史教育』3(1954. 4): 20-24.
- 編(2000)『在日朝鮮人関係資料集成(戦後編)第7巻 都立朝鮮人学校関係』不二出版.
- 朴正鎮(2012)『日朝冷戦構造の誕生 1945-1965: 封印された外交史』平凡社.
- 松下佳弘(2018)「戦後の在日朝鮮人教育行政の展開(1945~55年): 在日朝鮮人と地方自治体の関係」京都大学大学院教育学研究科博士学位論文.
- 李東準(1956)『日本にいる朝鮮の子ども: 在日朝鮮人の民族教育』春秋社.
- 林光澈(1950)「渡航史-並にその性格-」『民主朝鮮』1950. 7: 37-47.
- (1953)「在日朝鮮人問題: その歴史的発展について」, 歴史学研究会編『歴史学研究 別冊 特集号 朝鮮史の諸問題』岩波書店, pp.66-72.

#### 【コリア語】

- 이타가키 류타(2014)「조선인 강제연행론의 계보(1945~1955년)」, 동북아역사재단 편, 『한일협정 50년사의 재조명 Ⅲ』 동북아역사재단, pp.109-140.
- (2017)「조선인 강제연행론의 계보(1955~65)」, 오오타 오사무·허은 편 『동아시아 냉전의 문화』 소명출판, pp.53-101.

---

## On the Making Process of the Film “Children of Korea (*Chōsen no ko*)” (1955)

Ryuta Itagaki

---

The documentary film “Children of Korea (*Chōsen no ko*)”, released in March 1955, was produced in the midst of the counter movements against the Tokyo Metropolitan Board of Education’s decision in October 1954 to close the Tokyo Metropolitan Korean Schools (*Tōkyō-toritsu Chōsenjin Gakkō*). This article analyzes the making process of “Children of Korea” in order to historicize the political and social relationships which were reflected both explicitly and implicitly in the film. The documentary was produced by the Korean education movement organizations and was scripted and directed by the Zainichi Korean Cineaste Group (*Zainichi Chōsen Eigajin Shūdan*) with the professional assistance of Japanese members of the Documentary and Educational Film Production Council (*Kiroku Kyōiku Eiga Seisaku Kyōgikai*) which was led by the Japanese Communist Party. Based on the ⟨first draft⟩ of the scenario written by Arai Hideo, they started shooting from late December 1954. Facing with objections within the production staffs, however, they ceased shooting for a time and asked Kyōgoku Takahide to rewrite the scenario, what I call the ⟨revised version⟩. One of the most radical revisions was that Korean schoolchildren had come to narrate in most of the scenes as if they read their own compositions. As a result, the representation of the independent identity of Zainichi Koreans had been emphasized in the film. Educational activities in Korean schools and relationships among educational movements at the time were vividly recorded in “Children of Korea”. Toshiko/Minja’s scene of reading her composition well-reflected such relationships and changes in the film. However, due to the scenario revision and financial difficulty, the completion of the film had delayed more than a month. During the delay, the strategy of the counter movement had shifted from the anti-closure of the Metropolitan Korean Schools to negotiation on conditions in privatizing the schools, ending up with the inactive screening of the film.

**Key words** : Documentary film, Korean schools in Japan, Children’s compositions

